日本医史学雑誌第四十二巻四号　平成八年一月十七日受付
平成八年十二月二十日発行　平成八年四月　四日受理

尾張藩薬園の成立と変遷

遠藤正治

はじめに

尾張藩は幕末において本草学が独自な発展をとげた特異な地域に数えられる。当然、それを可能にした医学や本草学に関する尾張藩の政策の影響が注目されるが、この分野における尾張藩の施策についてはあまり伝えられていない。江戸期における医学や本草学の発展は、薬園の存在と不可分であった筈である。この薬園の面から尾張藩の本草学を眺めるとどのようになろうか。

尾張藩の薬園についてはすでに上田三平の先駆的研究があり、その著『日本薬園史の研究』[1]では次の薬園図二点を紹介している。

「元御薬園御絵図」〈元禄六年〉……第1図
「尾張藩御深井御薬園絵図」……第2図

上田は、前者を尾張藩初期の薬園図とみなし、これを拡張した薬園が後者であると解釈した。後者は栽培薬草を一点ずつ彩色図で描いたものであり、他藩の薬園図には類例をみない出色の作品である。前者の年記から、後者は元禄六年（一六九三）より後代のものとみなされた。上田に続いて、右左見[2]、吉川[3]、深谷[4]、水野[5]、水野・遠藤[6]らの諸論考が現われ

るが、いずれも上田の解釈が踏襲され、これがほぼ通説となっている。しかしこの通説に従うと、これらの地形は諸種の城下図の地形と整合せず、現在地の同定が難しく、現在地は今日まで明らかにされていない。

今回、これらの薬園図の原図をはじめ、各種の尾張藩絵図の調査を試みたところ、従来の通説と異なったいくつかの新知見が得られたので報告する。

一、御深井御薬園の成立と変遷

（一）本御薬園の成立

尾張藩の初期の薬園は、名古屋城本丸の北方の御深井（おふけ）または下御深井（したおふけ）と呼ばれる十万坪を越える広大な庭園の一角につくられたので、のちにはその外の隣接地にも拡張されるが、御深井御薬園と総称される。御深井（ふけ）とは湿地・沼沢地の意である。御深井御薬園のうち最初に開設された部分は本（もと）御薬園あるいは元御薬園と呼ばれた。この本御薬園の成立時期はどこまで遡ることができようか。

幕府の江戸における最初の薬園、麻布御薬園と大塚御薬園が寛永十五年（一六三八）に開設されてからしばらくすると、そこでとれた薬種が尾張藩をはじめ御三家に下附されるようになる。[7] 尾張藩の日記[8]によれば、①正保二年（一六四五）閏五月二日、②同年十二月廿五日、③同三年十二月十日、④慶安元年（一六四八）十一月廿七日、⑤同二年十二月二日にそれぞれ下附されたことを記している。『徳川實紀』によれば、うち①は尾藩のみ、②と⑤は尾・水の両藩、③は紀・水の両藩、④は尾・紀・水の三藩にそれぞれ下附されたとし、③を除いて、ほぼこれを裏付けている。[9] さらに、尾張藩の日記には、

承応元年（一六五二）十二月朔日　殿様え御薬種被進候間、明日御家老御指出候様にと松平和泉守殿御指図有之

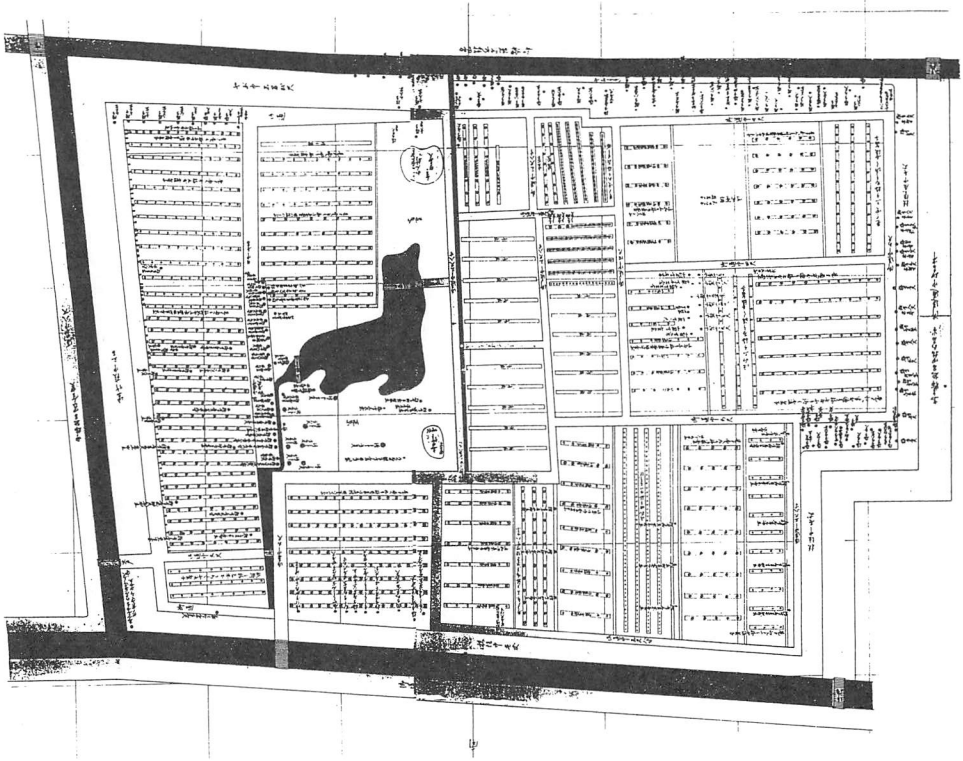
同年　十二月二日　御薬園の御薬種三十九味御拝領之

とあり、ついで薬草栽培の記事があるという。二代藩主光友が四代将軍家綱から薬種三十九種を拝領し、これを栽培したというのである。

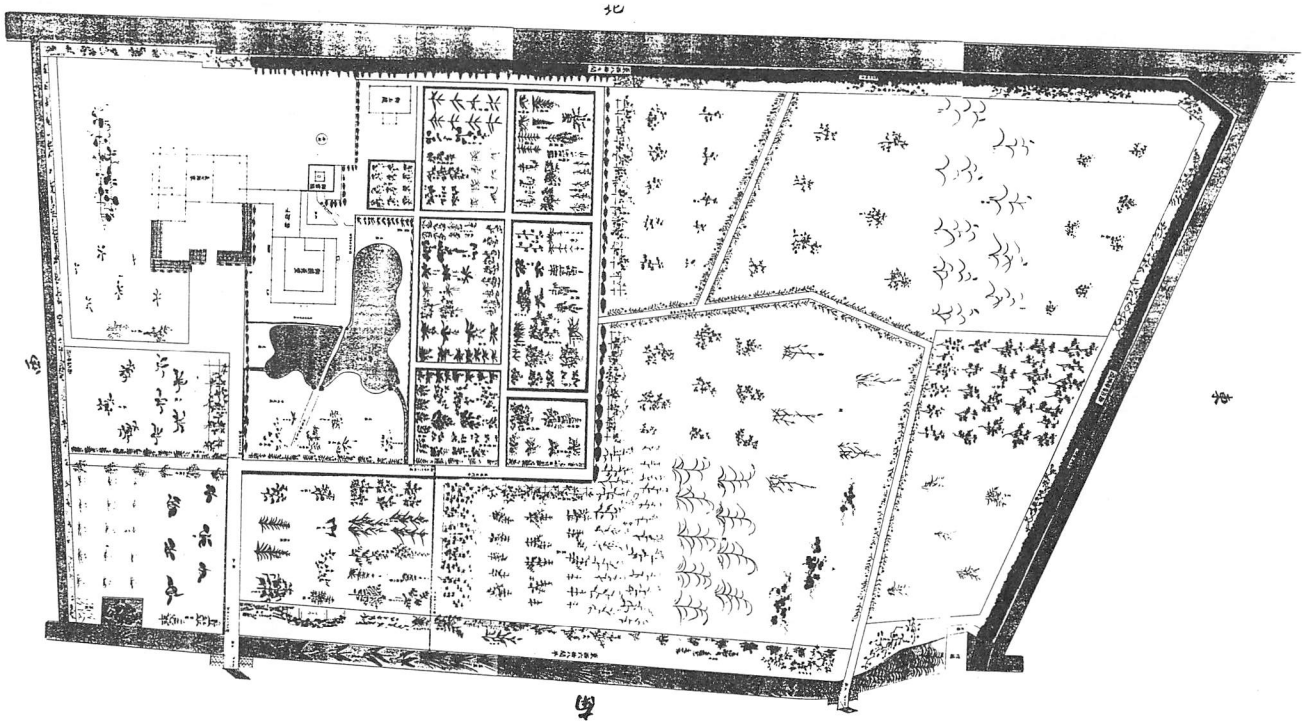
さて、「元御薬園御絵図」（第1図）と「尾張藩御深井御薬園絵図」（第2図）との新旧を検討しておこう。まず樹木の有無をみると、前者には樹木が多数あり、その高さと幹廻りを含めて詳細に記載されているのに対して、後者には杉の木を除いて樹木らしいものがほとんど描かれていない。前者に記載される杉の木には高さは七間、廻り三尺のものがあり、樹齢は推定四十数年に達している。[10] これは通説と逆に前者が新で後者が旧であることを物語っている。次に、建造物の有無に注目すると、前者には薬園奉行の役宅と御薬園堂が無いが、後者では存在する。建造物の有無は、後述する理由により、取り壊されたか、あるいは移転されたと解釈できるので、これも前者が新で後者が旧という証拠とみなせる。さらに敷地の大小の問題も、後述のように、時を経てむしろ縮小整備されたと解せる。いずれの点においても、通説とは逆に、前者が新で後者が旧という結論に導かれる。しかも両者の間には四十数年に近い長年月の経過が推察される。

そこで後者「尾張藩御深井御薬園絵図」の成立時期の上限を探ると、図中の泉水の部分に「向嶋ニ在シ板一枚橋唯今是ニ懸ル」とある書込みがヒントになる。「向嶋」とは御深井内にあった松山の御茶屋の別名であり、この御茶屋は寛永十五年に創建され、二十年後の万治元年（一六五八）に廃止されたという。[11] この廃止にともなう廃材が泉水の橋板として利用されたとすれば、万治元年頃以後ということになろう。

「尾張藩御深井御薬園絵図」は模写図であり、その原図は徳川美術館に所蔵されることが同館の小池富雄氏によって公表された。[12] 小池氏によれば、原図は、紙背に「御薬園之図」[13]とのみ記され、書風や料紙・彩色などから十七世紀後半頃に描かれたものとみられるという。原図と対照すると模写図には若干の誤記がみられる。原図によれば、栽培植物は一一五種を数え、薬園全体に堀をめぐらしてあるが、薬園の中央部にはさらに杉並木によって特別に保護したとみられる区画があり、いわば二重構造をなしている。この区画の薬草はまさしく三十九種を数える。



第１図 「元御薬園御絵図」（元禄六年） 『日本薬園史の研究』所載



第２図 「尾張藩御深井御薬園絵図」 『日本薬園史の研究』所載

荆芥・薩摩防風・三七・白歛・木香・商陸・コエンドロ・升麻・知母・地黄・大黄・イノンド・瞿麦・香柏子・白朮・竜脳薄荷・冬葵子・鬱金・茴香子・和川芎・馬鞭草・胡黄連・続随子・天門冬・澤蘭・百合草・紫苑・香附子・人参・ハツクリ・薄荷・タカトウ草・良薑・フナバラ・細辛・附子・河原柴胡・益母草・唐川芎

これらは舶来間もないハーブや和漢の代表的薬草である。承応元年に将軍家綱から下附された薬種であるとするなら、この区画はいわば拝領薬種区であったわけで、特別な囲いをしなければならなかった理由も理解できる。この三十九種のうち荆芥・地黄・瞿麦・和川芎・澤蘭・香附子・益母草・唐川芎の八種は婦人薬であり、婦人薬が重視されていることも窺われる。これは、二代藩主光友は家康の孫にあたり、その正室として三代将軍家光の長女千代姫（霊仙院）を迎えていたことと関係しようか。千代姫は寛永十六年、三歳で輿入れしたとされる。寛文九年（一六六九）有名な江戸の下屋敷「戸山荘」が光友によって造営が開始されたのもこの千代姫をなぐさめるためであったとされる。[14]

「御薬園之図」からみて右の拝領薬種区は約三三〇坪にすぎず、生産を目的としたものではなく見本園の性格が強い。薬草には外国産や野生のものが多く、大黄や人参を例にとってもわかるように、当時の名古屋における栽培は容易でなかったと思われる。

（二）新御薬園への拡張

初期の本御薬園は、栽培状況からみて、荒廃を免れなかったであろうから、早晩何らかの改変を余儀なくされたものと思われる。この改造を確認できる最も早い絵図は、やはり光友時代の貞享元年（一六八四）の「下御深井絵図」（蓬左文庫所蔵）である。これには本御薬園の西隣に南北二区画の新御薬園が描かれている。これに類似した絵図に「御鳥部屋御薬園御樹木畑絵図」（蓬左文庫所蔵）がある。この標題から、通説では「御鳥部屋御薬園」なる薬園が新たに増設されたかのように解釈されているが、両図を対照すれば、明らかに御鳥部屋は御薬園とは無関係である。「御鳥部屋御薬園御樹木畑絵図」によって本・新御薬園の規模をみると、

本御薬園　北六十四間、南五十三間、東四十四間、西四十三間二尺、　約二六〇〇坪
新御薬園（北園）　北七十七間、南七十三間半、東四十三間二尺、西五十二間半、約三五〇〇坪
新御薬園（南園）　北五十間半、南四十七間半、東四十四間半、西四十二間、　約二〇〇〇坪

本御薬園のみに限れば、「御薬園之図」に描かれる本御薬園は北八十七間、南六十八間、東四十二間、西四十三間で坪数約三三五〇坪であるから、東部が七五〇坪ほど削り取られた恰好になるが、新御薬園と合せた総坪数は八一〇〇坪となり、全体として二倍半近くに大きく拡張されたことになる。しかも、「御薬園之図」にあった薬園奉行の役宅や御薬園堂は新御薬園に移されており、本・新御薬園は統一的に経営されたことがわかる。

新御薬園に栽培された植物を「御薬園御絵図」（蓬左文庫所蔵）によってみると、ぶどう・お茶・梅・杉・芍薬・牡丹・野老・松・グミ・めうが・ふやう、その他花壇などで薬園というよりは果樹園的なものに後退している。ただし、芍薬・牡丹などは薬草として栽培された可能性があるので、必ずしも観賞用であったとは速断できない。この傾向は本御薬園の部分でも同様であり、拝領薬種区の部分の変化を「元御薬園御絵図」[15]でみると、水瓜・覆盆子・梅・あんめんとう・紫蘭・花しょうぶ・しろ桃、となっている。

（三）西ノ新御薬園への拡張と御深井御薬園の現在地

新御薬園は、見本園というよりは、種類をしぼって多量の収穫を挙げる実用園への転換がはかられている。この傾向は西ノ新御薬園の増設においてもみられる。

「新御薬園指図」（蓬左文庫所蔵）によってその規模をみると、

西ノ新御薬園　北約百十四間、南約百十四間、東約六十九、西六十九間半、約七九〇〇坪

という大規模である。しかし、まだ設計図の段階であろうか、ぶどう・お茶・たばこ・けし・茶花・その他が記載されるのみである。

西ノ新御薬園は新御薬園の西側に増設されてあり、「御薬園御樹木畑御厩畑絵図」（蓬左文庫所蔵）によってその区画を**第3図**のように位置づけることができる。この図によって前述の「御鳥部屋御薬園御樹木畑絵図」との関連がつき、各薬園の現在地の比定が可能となる。推定現在地は**第4図**のように、本御薬園は北区名城一丁目の名城公園内、新御薬園は名城公園内・西区堀端町および数寄屋町の一部、西ノ新御薬園は堀端町と数寄屋町の一部の辺りである。

（四）御深井御薬園の薬園奉行

前述の各種絵図のほか、徳川林政史研究所所蔵の尾張藩の分限帳、『藩士名寄』や『御小納戸日記』などによって薬園奉行系譜をたどると、ほぼ細井家の累代が任命されていたことがわかる。

細井長七郎（～万治元～）――細井長七（～貞享元～）――細井長太郎（～元禄八～）――細井長七（～正徳年間～）
　　└――広田牧右衛門（～正徳年間～）

細井弾助長七郎（～享保二二）――細井園右衛門（享保二二～安永九）（御薬園預）――細井長吉（安永九―寛政八）（御薬園預）

細井家の系譜の詳細は不明であるが、医家ではなく、薬園預から御庭預や御庭中間に転じた例もみられるので、御深井庭に勤務する家系であったのであろうか。いずれにしても石高十石程度の微禄の下級藩士であった。

この系譜の中で、薬園奉行が二人制をとっているのは、正徳年間に広田牧右衛門が加わった時のみである。[16] これは大規模な西ノ新御薬園の増設と関連がある。「御薬園地割御絵図」（徳川林政史研究所蔵）には西ノ新御薬園の薬園奉行として広田牧右衛門の名が記載されているからである。西ノ新御薬園のあった西御深井は「巾下御屋敷」とか「巾下御茶道丁」と俗称では巾下を冠して呼ばれる土地であったから、西ノ新御薬園は巾下御薬園とも呼ばれていたようである。朝日重章の『鸚鵡籠中記』の正徳五年（一七一五）九月十七日の条に「今日巾下御薬苑ノ跡新地やしき被下」とあることか

ら、正徳五年頃には西ノ新御薬園は廃園となっていたことが推定される。

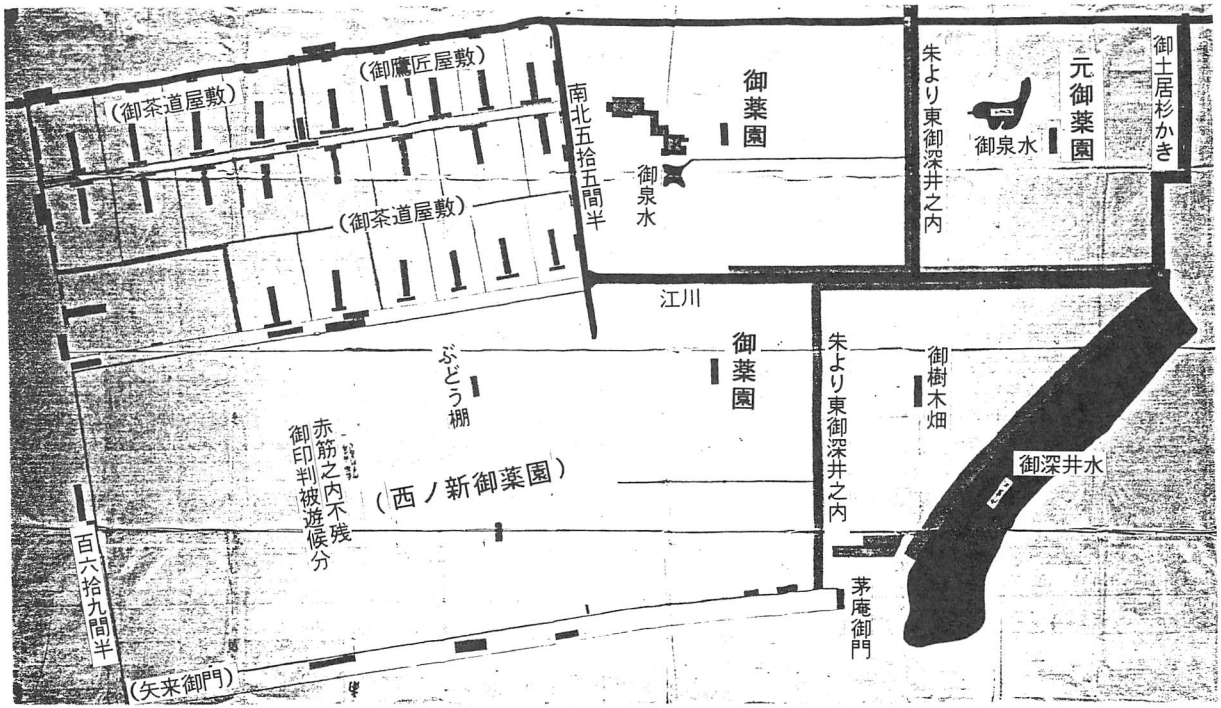
天明五年（一七八五）大幸川の大改修により、大幸川（堀川）が新御薬園地を縦断したので薬園地は大きな改変を受ける。この後の姿は「茅庵御門外御薬園曲輪之図」（蓬左文庫所蔵）にみることができるが、これには本御薬園地が南北百五間に広げられて描かれてあるものの、薬園ではなく「畑」と記載されている。

二、御下屋敷御薬園の成立と変遷

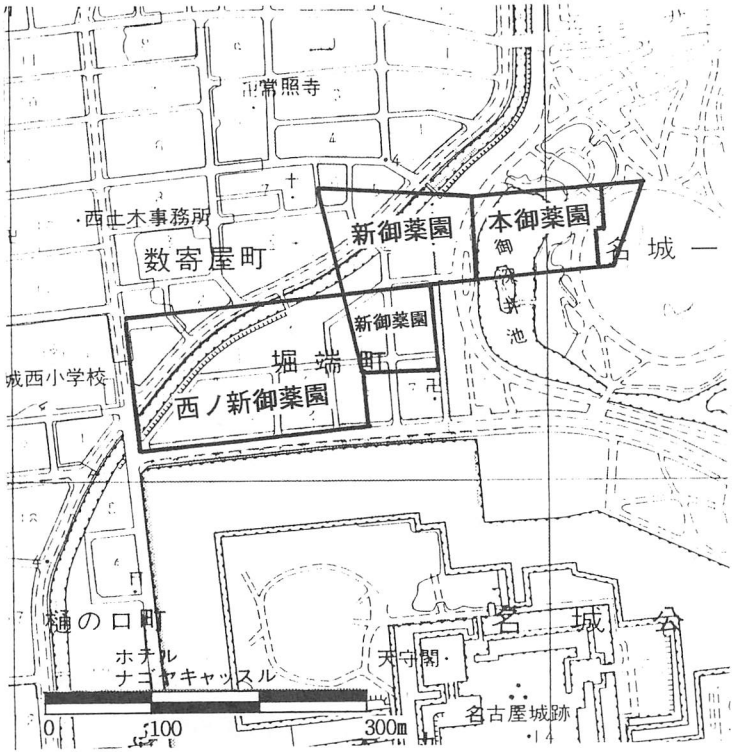
（一）人参畑から御薬園へ

御下屋敷は光友によって延宝七年（一六七九）名古屋城東南に築かれた六万四千坪におよぶ別荘である。のちこの北庭の東に薬園が営なまれたので御下屋敷御薬園と称されるが、名称や規模は時代とともにかなりの変化がみられる。三村森軒の『尾州薬園濫觴録』[17]によれば、この薬園のはじまりは、享保二十年（一七三五）九月、七代藩主宗春が将軍吉宗から人参七本と甘草十本を拝領し、この地に栽培したことにある。はじめ宗春の御側医高橋玄仙の指図によって植え付けがなされたが、のち普請組寄合の三村森軒が人参御用を命ぜられ、これを担当したとされる。森軒は、用土・施肥・病虫害対策・日覆などに独創的な試行錯誤を繰り返しながら、優良な朝鮮人参の栽培に成功した[18]。

延享二年（一七四五）には人参総数は八八三七本、実数七一〇九粒に達した。このうち一五〇〇粒は御前に進上、その他に家老をはじめ山村甚兵衛・千村平右衛門・用人衆・組頭などに下附された[19]。この功によって森軒は新知行百石足高五十石の計百五十石を与えられるが、同年十月森軒は通風病のため人参御用を辞任する。森軒の跡は木下宇左衛門・安井彦太夫・荒尾六右衛門らがその管理にあたり、人参栽培の規模をさらに拡張させる。宝暦十三年（一七六三）朝鮮人参実三〇〇粒を奥州守山藩主松平大学頭へ進上し[20]、また、松平君山によって朝鮮人参実四万粒が東谷御林御人参御薬園に蒔付けられた事実[21]などは、御下屋敷御薬園の成功をよく物語るものと解せるが、この年全国の栽培人参が百万根余に達し



第3図　最盛期の御深井御薬園の全区画
「御薬園御樹木畑御厩畑絵図」（蓬左文庫所蔵）より作成



第４図　御深井御薬園の推定所在地
国土地理院「名古屋城」1:10000地形図（平成５年）より作成

たとされ[22]、全国的な流行とも無関係ではなかろう。

森軒のころまでの御下屋敷御薬園は人参畑と称されていたが、宝暦八年（一七五八）七月安井彦太夫が御薬園奉行に任命[23]されたころには御薬園と呼ばれ、ついで宝暦十一年九月荒尾六右衛門が御薬園奉行に任命[24]されたころには御下屋敷の西隣に御薬園役所が設けられ、御薬園が名実ともに確立している。これに対して、このころになると御深井御薬園は、管掌者として細井長七[25]が御薬園奉行ではなく御薬園預りに任命されており、相対的な位置の低下を窺わせる。

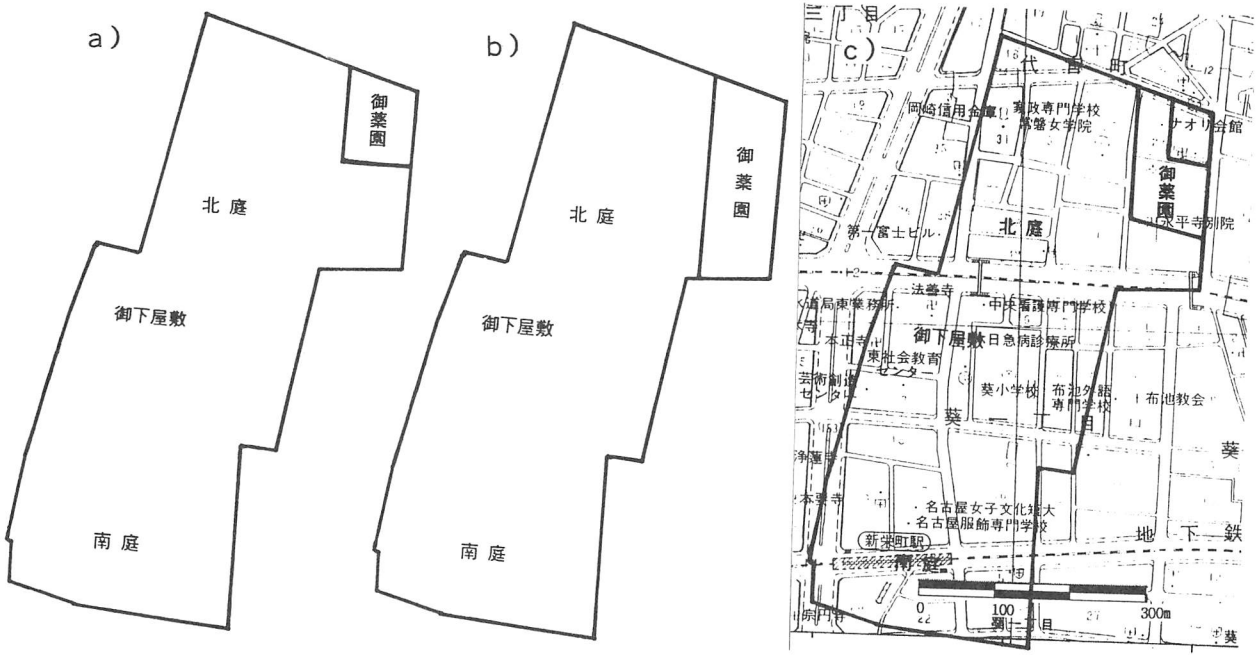
享保二十年から宝暦期ころまでの御下屋敷御薬園の地所は**第5図a**のようであり、約三〇〇〇坪あったものと推定できる[26]。のちさらに発展を続け、最盛期には一時**第5図b**のように約六八〇〇坪の規模にまで拡張されたものとみられる[27]。

（二）最盛期の御薬園と水谷豊文

文化二年（一八〇五）三月、御薬園掛は御小納戸頭取衆の勤めと定められ[28]、これにともない医学館主・浅井貞庵が御薬園預りに任命される。貞庵の下で水谷豊文が御薬園御用のち御薬園御用懸に任ぜられ、以後豊文が御薬園経営の実質的担当者となる。

豊文はこのため年々、尾張・三河をはじめ伊勢・志摩・近江・美濃・信州・南紀などの諸州や木曽・伊吹山などに採薬して各採薬記を作成する。この採薬には若い日の伊藤圭介も同行している。これらの採薬によって集められた薬草木の多くは御下屋敷御薬園に栽培され、また、医学館薬品会に出品された。豊文は、人参栽培にかぎらず、外国産の植物をふくめて多種の植物を収集し、蘭書によるリンネの分類法を試みるほどであったので、この豊文の意向が御薬園の経営にも大きく反映したものと思われる。

文政九年（一八二六）二月江戸参府途上のシーボルトと宮で会見した豊文が、「約二千種の植物のある自分の庭園」と述べたのは、自宅の薬園ではなく御下屋敷御薬園を指すものとみなければならない。御園（みその）にあった豊文の自邸は約五百坪程度であり、ここに二千種を栽培する薬園を設けたとはとうてい考えられない[29]。岡田啓『小冶田之真清水[30]』に「本草



第５図　御下屋敷御薬園地の変遷　ａ）享保～宝暦の頃　ｂ）最盛期　ｃ）幕末期、推定所在地
国土地理院「名古屋城」1:10000地形図（平成５年）より作成

家功者の士数人及び下役の者二十余人附属し培養手をつくせり、近年人参格別繁茂し且又天保年中より軽粉製作始まれり」とあり、広大な薬園の鳥瞰図が描かれてあるのは、この貞庵と豊文時代の最盛期の御下屋敷御薬園の姿にほかならない。

（三）幕末の御薬園

浅井貞庵の没後、貞庵の子柴山が御薬園奉行に任ぜられ、柴山が没すると柴山の子樺園がこれを継ぐというように代々浅井家が御薬園奉行となって維新に至る。開設期から維新までの薬園管掌者の系譜をまとめると次のようになろう。

高橋玄仙（享保二〇―元文元）――三村森軒（元文元―延享二）（人参御用）――木下宇左衛門（延享二～）――安井彦太夫（宝暦八―一一）

荒尾六右衛門（宝暦一一―明和二）……浅井貞庵（文化二―文政一二）――浅井柴山（天保三―安政元）――浅井樺園（元治元―明治元）

水谷豊文（文化二―天保四）（御薬園御用）

石黒済庵（万延元―明治2）（御薬園御用）

貞庵と豊文の没後の御下屋敷御薬園は、外見上、次第に衰退する。薬園地に藩士宅や寺院の建設が進められ、薬園面積が縮小していく。万延・文久期頃の所在地は、**第5図c**のようであると推定でき、その規模は約三三〇〇坪と最盛期に比べて半減している。[31]

天保十二年（一八四一）木曽黒沢・荻原両村に尾張藩御薬園が開設され、ここに朝鮮人参が栽培され、弘化四年（一八四七）年頃からその収穫が始まる。これに倣い美濃付知村などでも人参栽培が導入され、一時順調に収穫をあげる。[32]こうして木曽や美濃など藩領各地で朝鮮人参だけでなく各種薬草の栽培が活発になる。これを指導・監督したのは御下屋敷御薬園の薬園奉行とその配下の本草家達であった。この藩領各地での薬草栽培は藩が庄屋を中心とする百姓に委託する形式で行なわれ、集荷や薬舗への販売などは御下屋敷御薬園の手代が担当した。従って、御下屋敷御薬園の業務の重点

が転換している。この薬園機能の転換が薬園地の縮小として表われたものと思われる。明治初年御下屋敷御薬園は御国産懸りに併合され、同二年九月廃園となる。

おわりに

絵図の分析を中心に尾張藩の薬園の成立と変遷の過程を探ってきた。初期のものは御深井御薬園で、通説と異なり、承応元年頃に成立し、少なくとも天明年間ころまで続いた。一方、御下屋敷御薬園が朝鮮人参の栽培を目的に享保二十年に設立され、紆余曲折を経ながらも明治二年まで続いた。両園の成立には幕府薬園の強い影響がみられた。

二一七年もの間連綿と継続して経営された事実は特筆に値する。経験の蓄積が、朝鮮人参の栽培などで良好な成果をもたらした。幕末尾張における独自な本草学は、直接間接に薬園につらなった本草家たちによって開花させられたのである。

本論の要旨は一九九五年日本医史学会十一月例会において発表した。本研究の一部は尾張本草学研究会(会長野呂征男氏)における共同研究の成果である。執筆に際して、同研究会の諸兄、水野瑞夫岐阜薬科大学学長から多くのご教示とご協力を頂いた。資料の調査に際しては小池富雄徳川美術館普及課長、山本祐子名古屋市博物館学芸員、徳川林政史研究所、名古屋市蓬左文庫、名古屋市鶴舞中央図書館、愛知県図書館にお世話になった。皆様に謹んで御礼申し上げる。

注と参考文献

(1) 上田三平『日本薬園史の研究』一三九～一四二頁、一九三〇(昭和五年)、同著・三浦三郎編『改訂増補日本薬園史の研究』一三〇～一三二頁、一九七二(昭和四十七年)
(2) 右左見直八「薬園復活論」『嘗草』八号、六五～八四頁、一九三二(昭和七年)
(3) 吉川芳秋「尾張薬園のおもいで」『郷土文化』一五巻一号、一〇～一五頁、一九六〇(昭和三十五年)、同『医学・洋学・

本草学者の研究』四三～四八頁、八坂書房、一九九三（平成五年）

（4）深谷義明『愛知県薬業史』八六～九九頁、一九六六（昭和四十一年）

（5）水野瑞夫「尾張藩の薬園」前掲（1）『改訂増補日本薬園史の研究』二六四～二七四頁

（6）水野瑞夫・遠藤正治「尾張の本草学の歴史①　黎明期の尾張本草学」『日本の生物』二（五）、一七～二〇頁、一九八八（昭和六十三年）

（7）今大路親顕『商山年譜』によれば、家光の代には「御薬園之御薬種一箱ヅヽ、御三家様方へ進メラレ」たという。宗田　一「幕府典薬頭の手記に見える本草」『東アジアの本草と博物学の世界』上、一一七頁、思文閣出版、一九九五（平成七年）

（8）尾張藩の日記の原本は不明、ここでは前掲（1）文献に拠る。

（9）『徳川實紀』（『國史体系』第四十一巻）第四編、三九九、四二五、四六六、五七〇、六二九頁、吉川弘文館、一九六五（昭和四十年）、岩下哲典氏のご教示による。

（10）上原敬二『樹木大図説』1、三四三頁、一九五九（昭和三十四年）

（11）奥村得義『金城温古録』（4）御深井御庭編、『名古屋叢書続編』第一六巻、一〇七頁、一九六七（昭和四十二年）

（12）小池富雄「新薬園（御深井薬園）図について」『慈斎研究会だより』五八号、一、七～八頁、一九九二（平成四年）

（13）「御薬園之図」一舗、二三八×一四六cm、徳川美術館所蔵

（14）小寺武久『尾張藩江戸下屋敷の謎』、一五～二〇頁、中公新書、一九八九（平成元年）

（15）「元御薬園御絵図」の原図は蓬左文庫所蔵、「五〇〇」。原図と比較すると『日本薬園史の研究』附図二には「杉」を「松」とする誤写や樹木の寸法などの誤写が散見される。

（16）前掲文献（1）『日本薬園史の研究』一四〇頁には、廣田牧左衛門の名が元禄頃に見えるとあるが、『元禄八亥頃分限帳』（徳川林政史研究所所蔵）では御薬園奉行は細井長太郎のみで廣田の名は見えない。一方、『正徳年中分限張』（徳川林政史研究所所蔵）には御薬園奉行として「拾弐石弐人分細井長七、同廣田牧右衛門」とあり、廣田牧右衛門の名で現われている。

（17）三村森軒『尾州薬園濫觴録』、徳川林政史研究所所蔵。文中に森軒の宝暦十年記があるが、天保十二年写本をさらに昭和八年転写した本であり、掲げられた数値などにはかなり誤写があるとみられる。

(18) 後藤尚夫・山口茂冶・田中俊弘「『尾州薬園濫觴録』について」『薬史学雑誌』三〇（一）、一八～二四頁、一九九五（平成七年）
(19) 前掲文献（17）
(20) 前掲文献（17）
(21) 安江政一「『東谷御林人参一巻』と松平君山」『日本医史学雑誌』三〇巻一号、五〇～五五頁、一九八四（昭和五十九年）
(22) 宗田　一「官製栽培の朝鮮種人参（オタネニンジン）販売事情」『実学史研究X』七頁、思文閣出版、一九九六（平成六年）
(23) 『士林泝洄』、名古屋市蓬左文庫所蔵
(24) 前掲文献（23）
(25) 『尾州御留守日記三』（宝暦十二年四月至五月）、五月二十五日、徳川林政史研究所所蔵
(26) 「名古屋路見」、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵から推定。「名古屋路見」の比定年代は、山本祐子「名古屋城下図の年代比定と編年について」『名古屋市博物館研究紀要』一七巻、一六頁、一九九四（平成六年）によれば、宝暦十一～明和七年とされる。
(27) 『尾張国町村絵図　名古屋市域編II』徳川黎明会叢書、国書刊行会、一九八八（昭和六十三年）に出る「人参御薬園」図から推定。
(28) 『江戸御小納戸日記一』（文化二年正月至五月二十日）、三月朔日、徳川林政史研究所所蔵
(29) 前掲文献（3）『医学・洋学・本草学者の研究』三五二～三五三頁
(30) 岡田啓『小冶田之真清水』、東海地方史学協会、一九八六（昭和六十一年）覆刻
(31) 「尾張名古屋絵図」、名古屋市博物館所蔵および、「御下屋敷惣図面」、名古屋市蓬左文庫所蔵から推定。
(32) 安江政一「名古屋藩における薬用人参」『日本医史学雑誌』三三巻三号、三二三～三三三頁、一九八七（昭和六十二年）

（岐阜県立華陽高等学校教諭）

The Origin and Development of the Herbal Gardens of the the Owari Clan

by Shoji ENDO

The early herbal garden of the Owari Clan was called Ofuke-Oyakuen (御深井御薬園). By careful reading of the "Illustration of the Honorable Herb Garden (Oyakuen no Zu, 御薬園之図)", it is pointed out that this garden might have been opened around 1652 when 39 species of herbs granted by Shogun Iemitsu were planted. This garden was enlarged in about 1684. We found that the well-known "Honorable Illustration of Former Herb Garden (Moto-oyakuen On-ezu, 元御薬園御絵図)" was a drawing of a part of this enlarged herbal garden.

On the other hand, in 1735 a new herbal garden, Oshitayashiki-oyakuen (御下屋敷御薬園) was opened for cultivation of Panax Shinseng. While this garden produced fair results at Panax cultivation, it was closed in 1869 at the Meiji Restoration. In the last days of the Tokugawa regime, herbalists of this garden had made original advances in natural history.